

2. 事業の概要と成果	
(1) プロジェクト目標の達成度	上位目標1：子どもたちの心的外傷ケアが実施され、PTSDからの予防が可能となる。 ガザ・西岸両地区において、一年間に渡る心理社会的ケアプログラムを実施した結果、参加した全ての子どもたちに PTSD の三大症状が全て揃った状態では認められなかったこと、三大症状の一部や二次的症状が認められた子どもたちについてはそれらの症状の改善が見られたことにより、PTSD の完全発症の予防と一部発症の場合の症状改善を達成した。 なお、本事業は PTSD の三大症状（回避・侵入・過覚醒）が全て揃い深刻な状態で1か月以上継続しているケースを完全発症＝クリニカルケースとして専門家・専門機関へのレファレンス対象としている。 （参照：別添6 専門家レポート2：心理社会的ケアプログラムの総合評価） 上位目標2：活動地において心理社会的ケア実践者が養成され、地元の人々の手によってケアを継続できる。 ガザ地区：1年間を通し、其々38回に渡る座学とワークショップ実践の研修を実施したことにより18名の心理社会的ケア実践者が養成され、本事業後も継続的に地元の子どもたちへケアを実施できる体制作りに貢献した。現在は不定期に養成者から子どもたちに対しケアが実践されている。今後も、提携団体とケアプログラムの提供方法について引き続き検討していく予定。 西岸地区：心理社会的ケアのデモンストレーションを通じた実践的な認知・理解向上を主目的としたトレーニングを幅広い参加者を対象に実施したことで、2年次以降の実践者育成の下地作りにつながった。
(2) 事業内容	1. ガザ地区における心理社会的ケアの実践と人材育成 <u>1-1. 子どもたちに対する心理社会的ケアプログラムの実施</u> 3 提携団体（エル・アマル社会復帰協会（ラファ市）、アル・シャルキーア開発協会、アル・ワリード慈善団体（共にハインユニス市））において各2クラス、計6クラスにて開催。女子64名（うち聴覚障がい児6名）、男子32名（うち聴覚障がい児7名）、計96名の8-16歳の子どもたちに対し、週1回のワークショップ（以下WS）にて心理社会的ケアを実施。各クラスとも38回WSを実施し、最後にその集大成として最終発表会を行なった。 （参照：別添2-1 心理社会的ケアプログラム実施実績（ガザ地区）） <u>1-2. 子どもたちに対する相互理解クラスの開催</u> 2017年7月15日～20日までサマーキャンプを開催。対象の子どもたちが市内の余暇施設に集まり、4日間の集中WSと1日の遠足を行った。 <u>1-3. ワークショップ外での子どもたちのサポート</u> 事業開始から2ヶ月間で、弊団体職員と研修生が、対象とする子どもたちの保護者や家族との面会や、学校訪問と担任教師とのミーティングを行い、連携体制を構築。その後、提携団体を通し各保護者と毎月3回以上連絡を取り合い、主に保護者による、家庭や学校での子どもたちのフォローアップをサポートした。 また、地域団体とのネットワークを拡大・強化するとともに普及可能性を検討するため、他団体との意見交換や実践者育成研修の見学受入を行なった。

	1-4. 心理社会的ケア実践者の育成 ➤ 各提携団体にて子どもたちの活動を行っている 18 名を研修生とし、週に 1 回、現地職員により座学による研修会と活動 1-1 の WS の実践を行った。年間の開催実績は、研修会 38 回、WS 実践 38 回。 ➤ 第二回専門家派遣（9 月）時に、専門家から音楽 WS の研修を実施した。 （参照：別添 3-1 実践者育成実績（ガザ地区）） 2. ヨルダン川西岸地区における心理社会的ケアの実践 2-1. 子どもたちに対する心理社会的ケアプログラムの開催 ジャラゾン難民キャンプ女子 29 名・男子 36 名、カランディア難民キャンプ男子 34 名（内右手に障がいを抱えている子 1 名）・女子 19 名、計 118 名の 10—13 歳の子どもたちに対し、週一ペースで合計 30 回の WS（心理社会的ケア WS22 回、補助的 WS4 回、レクリエーション WS4 回）を実施し、最後にその集大成として各難民キャンプでそれぞれ 1 回最終発表会を実施した。 （参照：別添 2-2 心理社会的ケアプログラム実施実績（西岸地区）） 中間報告書にて報告した子どもたちの状態や出席率の他、両難民キャンプのそれぞれ入植地・検問所に隣接しているという立地故の現地情勢や子どもたちが通う UNRWA の学校の状況等によって、年間を通してプログラムの変更を余儀なくされたが、その時々現状・ニーズに基づいて臨機応変に対応した。 2-2. 関係者・関係機関との連携 UNRWA Education Program とのミーティング：2 回 保護者説明会：2 回（各キャンプ 1 回） 保護者との個別連絡：随時必要に応じて 地元団体とのミーティング：6 団体各 1 回（イエス・シアター、Palestinian Association for Cultural Development NAWA、Early Childhood Resource Center、Defence for Children International-Palestine、YMCA、JICA 難民キャンプ改善プロジェクト（PALCIP）） 地元団体の活動見学・報告会参加：3 団体各 1 回（YMCA、JICA PALCIP、国境なき医師団スペインミッション） UNRWA スクールカウンセラー・学校長とのミーティング：随時（平均すると隔週ペース） 2-3. 心理社会的ケアプログラムの普及と実践者育成 ➤ 6 回の実践者育成トレーニング（内 3 回は専門家派遣に伴うもの）を実施した。（参照：別添 3-2 実践者育成実績（西岸地区）） ➤ プロジェクトマネージャーのナーセル氏とファシリテーターのマイ氏がそれぞれ 1 回ずつ地元ラジオに出演し、本事業について話をした。 ➤ 心理社会的ケアについてわかりやすく解説したパンフレットを作成し、ガザ・西岸両地区で広報資料として活用した。（参照：別添 7 パンフレット） 3. 西岸・ガザ地区合同研修会 3-1. 成果報告と勉強会 中間報告書にて報告の通り 8 月末日までに 2 回開催し、その後は両地
--	---

	区の課題の違いやガザの電力状況に鑑みて四半期ごとの開催を目指していたが、現地情勢の影響で実施は困難であった。そのため、シェアドライブやFacebook、Messenger等を通じた情報交換に切り替えてピアラーニング（スタッフ間の情報・意見交換を通じた協働学習）の機会を確保した。 3-2. 心理社会的ケアシンポジウム 2018年2月26日にラマッラで心理社会的ケアシンポジウムを実施した。ガザの職員も参加する予定であったが、現地情勢により出域ができなかったため、西岸のみを対象とした内容に切り替えての実施となった。
(3) 達成された成果	以下に述べる通り、本事業がパレスチナの子どもたちのメンタルヘルス向上とそれに伴う副次的効果として暴力行為の減少に貢献したことはSDGゴール3のターゲット3.4「2030年までに、非感染症疾患（NCD）による早期死亡を、予防や治療を通じて3分の1減少させ、精神保健および福祉を促進する」、および、ゴール16のターゲット16.1「あらゆる場所において、すべての形態の暴力および暴力に関連する死亡率を大幅に減少させる」に直接的に寄与するものである。 (ア) 本事業により期待される成果 1) 子どもたちの、心的外傷についての対応力が増すことで、占領による困難な状況下でもPTSDに対する予防力がつくこと。 →下記(イ) 1. 1-1.、1-2.、1-3.、2. 2-1.、2-2. 2) 知識と経験を持つケア実践者が育成され、各事業地に本来の効果的な心理社会的ケアモデルが根付くこと。 →下記(イ) 1. 1-4.、2. 2-3. 3) ガザ地区と西岸地区における心理社会的ケアの実践が拡大し、その課題を両地区で共有し、パレスチナ全土に心理社会的ケアのさらなる拡大を確立すること。 →下記(イ) 3. 3-1.、3-2. <u>直接裨益者： 317 人</u> ガザ地区：子どもたち 96 人＋研修生 18 人＝114 人 西岸地区：子どもたち 118 人＋第一回専門家派遣時のトレーニング参加者 20 人＋UNRWA スクールカウンセラー対象のトレーニング参加者 18 人＋第二回専門家派遣時のトレーニング参加者 14 人＋映画 WS トレーニング参加者 8 人＋ラマッラ・アルビーレの心理士・ソーシャルワーカー協会メンバーを対象としたトレーニング参加者 17 人＋第三回専門家派遣時のトレーニング参加者 8 人＝203 人 <u>間接裨益者： 12,648 人</u> ケアクラスの子どもたちの家族（平均 7 人）へケア効果が波及 ガザ地区子どもたち 96 人 × 7 人 = 672 人 西岸地区子どもたち 118 人 × 7 人 = 826 人 ケアクラスの子どもたちの友達（平均 5 人）へケア効果が波及 ガザ地区子どもたち 96 人 × 5 人 = 480 人 西岸地区子どもたち 118 人 × 5 人 = 590 人

	研修生・トレーニング参加者が本事業外の担当の子どもたちにケアの一部を実践する ガザ地区研修生 18 人 × 60 人 = 1,080 人 西岸地区 UNRWA スクールカウンセラー対象のトレーニング参加者 18 人 × 500 人 = 9,000 人 1. ガザ地区における心理社会的ケアの実践と人材育成 1-1. 子どもたちに対する心理社会的ケアクラスの開催 一般精神健康質問紙（GHQ）：プログラム前と後の回答結果の比較において、全体の 61% の子どもにメンタルヘルスが向上したことを意味する数値改善が認められ目標を達成した。 バウムテスト：プログラム前と後の結果の比較において、心のエネルギーを示す占有率と夢や希望の数を示す実の数について数値改善が見られた子どもはそれぞれ全体の 43% と 66% となり、占有率においては目標値 51% に届かなかった。 上記 2 つの心理テストについて、プログラム前の結果と後の結果との間にプログラムの有効性を示唆する因果関係があるかどうかを測る t 検定を実施したところ、全ての子どもを母集団とした総合判定において有意差を示す p 値が、GHQ およびバウムテスト共に 0.01 を下回り因果関係が十分認められプログラムの有効性が証明された。 （参照：別添 5-1 専門家レポート 1：GHQ とバウムテストの解析結果（ガザ地区）） ファシリテーターがそれぞれの子どもたちの性格や抱える問題を丁寧に把握したうえで、各 WS の取組みで全ての子に対して表現力の向上を図った。その結果、子どもたちは、各々が心に抱える負の感情を受け止め、しっかりと言葉や作品で表現して友達と共有し、つらい経験と向き合う事ができた。うち 4 人の子どものケースを別紙にて報告する。 （参照：別添 4-1 ナラティブレポート¹（ガザ地区）） 1-2. 子どもたちに対する相互理解クラスの開催 サマーキャンプにて、通常は別々のクラスでケアを受けている子どもたちが、一堂に会して集中 WS を行うことで、達成感を共有することができた。普段と違う環境で開放的になり、新たな出会いを経験することで、より深い内的洞察を行うことができた。また活動を通し、聴覚障がい児と非障がい児間で積極的な交流が行われ、聴覚障がい児が非障がい児に手話を教えたり、後の映画 WS では非障がい児によって学校における聴覚障がい児の学習の難しさを題材として取り上げたりと、相互理解が深まった。 1-3. ワークショップ外での子どもたちのサポート WS 外でのサポートとして子どもたちを取り巻く大人と連携を深めた結果、家族や学校から当事業への信頼と協力を得る事ができ、急な WS 時間割変更でも多くの子どもが出席し、特に注意が必要な子への個別対応を的確に行う事ができた。1 年を通しほとんどの子どもにおいて 95% 前後の出席率となり、プログラムの円滑な運営並びに子どもたち
--	--

¹ ナラティブレポート：プログラムを通して生じた変化を子どもの物語としてファシリテーターの視点でまとめた報告書

	への有益なケアに繋がった。 また、他団体との意見交換や交流によって心理社会的ケアプログラム・本事業の認知度向上やその有用性の理解促進に繋がったと同時に、2年目以降における連携可能性を模索し、結果としてそのうち2団体とは2年目のプログラムにおいて提携して実施することとなるに至った。 1-4. 心理社会的ケア実践者の育成 情勢不安のため、事業終了時に桑山専門家のガザ入域が叶わず面談を行うことができなかったが、現地職員による面接や客観評価点をつけることで各研修生の成果を図った。その結果、18名の研修生全員が9割以上の点数を取得し目標を達成した。 なお、本事業中にハインユニス市のUNRWAの小学校からシャルキアに課外活動を提供して欲しいとの要請があり、2名の研修生（マジッド氏、アブデルアジズ氏）が派遣された。2研修生は、当事業で学んだ心理社会的ケアの手法を活かし、250名の子どもたちを対象にアイスブレイクや語り合いのアクティビティを提供した。また、本事業後には8名の研修生が提携団体や個人によって其々30-90名の子どもたち向けのWSや保護者向けの説明会などを実施しており、継続してより多くの子どもたちへ心理社会的ケアが提供されていることを確認できた。 当事業の研修生たちのようなガザの若い世代には、紛争の影響や就職難が原因で無気力化・暴力化する傾向が多々見られる。そのような状況下において、当研修生たちは地域に当ケア手法を広めるためのキーパーソンとして責任感を持って学び、子どもたちの心に向き合い、また自己に向き合う中で、それぞれの職場や家庭、友人との人間関係において当事業の子どもたちの心の成長を伝え、紛争の影響で行き詰った社会に希望を与える存在となったと考える。 2. ヨルダン川西岸地区における心理社会的ケアの実践 2-1. 子どもたちに対する心理社会的ケアプログラムの実施 一般精神健康質問紙（GHQ）：プログラム前と後の回答結果の比較において、全体の68%の子どもにメンタルヘルスが向上したことを意味する数値改善が認められ目標を達成した。 バウムテスト：プログラム前と後の結果の比較において、心のエネルギーを示す占有率と夢や希望の数を示す実の数について数値改善が見られた子どもはそれぞれ全体の41%と46%にとどまり、いずれも目標値51%に届かなかった。 上記2つの心理テストについて、プログラム前の結果と後の結果との間にプログラムの有効性を示唆する因果関係があるかどうかを測るt検定を実施したところ、全ての子どもを母集団とした総合判定において有意差を示すp値が、GHQについては0.01を下回り因果関係が十分認められプログラムの有効性が証明された一方、バウムテストについては占有率・実の数共に0.05を下回らず因果関係は認められなかった。 バウムテストのガザと西岸両地区の結果を踏まえて評価ツールとしての妥当性を再検討した結果、検査者（テスト実施者）の理解度と主観が大きく結果に作用することと子ども達の心理的負担が大きいことに
--	---

	鑑み、2年次は不採用とすることとした。代わりに PTSD の三大症状や副次的症状についてのチェックシートを独自に作成し評価ツールとする。 (参照：別添 5-2 専門家レポート 1：GHQ とバウムテストの解析結果（西岸地区）) 心理社会的ケアプログラムの効果は必ずしも数字だけでは測れないことに鑑みて上記心理テストによる評価と併用しているナラティブ評価では、プログラムを通して子ども達のメンタルヘルスが確かに向上した様が確認できた。また、SDG ゴール 16 との関連において、プログラムの副次的効果として子ども達の暴力行為の減少が全体的に認められたため、事例の 1 つをナラティブレポートにまとめた。 (参照：別添 4-2 ナラティブレポート（西岸地区）) 1 年間の成果を子ども達がコミュニティの人々に対して発表する最終発表会は社会との再結合というトラウマからの回復最終段階にあたる重要なイベントであるが、参加した保護者から、子どもが兄弟に暴力をふるうことが減った、自信をもって自己表現できるようになった、積極的になった等々、プログラムを通した子ども達の変化について保護者視点のフィードバックを得ることができた。これはプログラムを通して子ども達のメンタルヘルスが向上したという上記結論を補完するものである。 2-2. 関係者・関係機関との連携 中間報告に記載の通り、関係者・関係機関との連携を通じて心理社会的ケアプログラムが現地のニーズに即したものであることを確認できた。加えて、保護者や UNRWA のスクールカウンセラー・学校長と密に連絡を取り合ったことで、子ども達についての多角的な情報に基づいた包括的なケアができたのみならず、彼らの心理社会的ケアについての理解度が向上したことで事業のよりスムーズな運営につながった。具体例として、心理社会的ケアの効果が UNRWA の学校に認められた結果、子ども達の出席率問題への対応策として事業 2 年次は授業時間の一部を使ってプログラムを実施するよう調整がなされた。 また、関連分野で働く他団体とのミーティングは心理社会的ケア・本事業についての認知を広めたと同時に、人材育成の対象者マッピングや将来的な新規パートナーシップ形成の可能性模索につながった。具体例として、演劇を通した心理社会的ケアを実践している地元劇団イエスシアターから新規共同事業の検討を打診され、現在検討中である。 2-3. 心理社会的ケアプログラムの普及と実践者育成 トレーニングを通して、本事業が定義するところの「心理社会的ケア」の理論と実践についての理解が心のケアに従事する参加者に広まり、2 年次以降の実践者育成の下地作りができた。 (参照：別添 3-2 実践者育成実績（西岸地区）) また、パンフレットや現地スタッフのラジオ出演によって、本事業の認知度が上がり、他団体からの問い合わせや将来的なパートナーシップ構築の模索につながった。 3. 西岸・ガザ地区合同研修会 3-1. 成果報告と勉強会 ガザと西岸の現地スタッフのピアラーニングとして、また、両地区の違いを知るという点では効果があった一方、両地区における心理社会
--	--

	的ケアのあり方の違いや課題の違いと両地区の政治的な対立に鑑み、当初予定していた両地区の橋渡しとなるような活動につなげていくことを現時点で目指すことは難しいとの判断に至った結果、この活動がスタッフミーティングの域を出ないものになったため2年次の事業内容からは削除した。 <u>3-2. 心理社会的ケアシンポジウム</u> UNRWA 関係者、国際 NGO、大使館、大学等から 51 名の参加者が出席し、アンケートに回答した参加者全員が本シンポジウムは非常に有益、または、有益であったと回答。また、他の難民キャンプや入植地に隣接する村など他地域への拡大を求める回答も多く得られ、この事業が現地のニーズに即したものであることとそれに応える成果を1年次に達成したことを確認した。加えて、シンポジウムに参加した UNRWA 関係者が事業の成果を認めてくれた結果、2年次はプログラム実施のための調整業務が1年次よりもよりスムーズに進む結果につながった。
--	---